

『ヤンデレ弟×ビッチ兄 メスイキ絶頂マッサージ～さあ、お仕置きしてあげるよ～』

著：涼白スズナ

ill : minato.Bob

「あー、すっげ気持ちいい」

「力加減、大丈夫？」

「うん。ちょうどいい。……あっ、そこ……うん、もうちょっと下とか」

「もう少し、下ね。ここかな。……うん、だいぶ硬いね。これじゃ辛かったでしょ」

「あっ、そうそう。めっちゃ気持ちいい……。あー、すっげいい」

いいマッサージというのは気持ちもリラックスしてくる。拓真に筋肉を弛緩させた体を委ねていると目がとろんとしてくる。

あまりの気持ちよさに瞼を落とし、うとうととしはじめた。

しかしそのときだった。腰のあたりに違和感を覚え、倫ははっとして目を開ける。

「……？」

心なしか、拓真の手が腰から移動し……今彼の手のひらが当たっているのは尻だ。しかも尻たぶをいやらしく揉み込まれている。

「たっ、拓真……！」

「なに？」

「なに、じゃないって。なんでケツ揉んでんだよ」

「臀部の筋肉もちゃんとほぐしとかないと。腰怠いんだろ」

「そりゃそうだけど……その揉み方」

「ん？ 揉み方がどうしたって？」

「いつ、いや、別に。……ん……っ」

やはり手つきに違和感を覚えた。これではまるで……そう、愛撫のような。

「……あ……」

手のひらでまるく擦りながら、指先は尻の肉を捏ねる。その動きが淫靡で、漏れる吐息も色づいたものとなった。

こんな声を聞かれてしまったら発情しているとわかってしまう、と倫はびくびくしていたが、拓真は平然としており、ほっとする。が、その直後その手は内腿をずっと撫でた。

「……ひっ！」

内腿は倫の弱い場所のひとつだ。拓真の手が内腿を撫で上げ、尻を揉んでいる。

手つきのいやらしさに思わず反応してしまいそうになる。これが他人ならばセクハラとでも思ってしまうところだが、なにしろ堅物の弟なのだ。万に一つもそういうことはない。

しかし拓真の手は確実に倫の性感帯を刺激していった。

「……っ、あ……」

声を出すまいとして、必死に堪えるが、拓真の指先が腰骨をなぞる。触れるか触れないかの優しい

タッチに、体が甘く疼き出す。

「どうしたの、倫」

「な、なんでもな……」

身じろぎながら快感をやり過ぎそうとする。

「施術中だよ。じっとして」

拓真に咎めるように言われ、他の治療院でマッサージを受けたときだって、きわどい場所に触れていた、と気持ちを落ち着かせる。

(そうだ……。真面目なこいつがそんなこと……)

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>